

Z-GISがあってよかった ユーザーの声

位置情報でだれでも 組合員の圃場を確実に把握



秋田県 JAあきた北
営農経営支援部
TAC 本多孝平さん

主力の「あきたこまち」の生産に不可欠なヘリ防除。Z-GISの地図には現在地情報が表示されるので、正確に圃場を把握でき、土地勘がない担当者でもまちがいをなく作業できます。作業履歴を残しておけば、翌年の実施内容の相談もスムーズです。

Z-GISで多角経営を パズルのように見える化



宮本農産 宮本健一さん
石川県 JA小松市管内
(稲作19ha、イグサ0.6ha)

米とイグサの複合経営で「小松量表」を製織し、販売しています。家族で多岐にわたる経営を支えるには、作業の効率化や省力化が課題。作業管理のシステムをいろいろ試してみても、Z-GISはExcel[®]入力が可能で家族間の共有がしやすく重宝しています。

現場で即入力で 帳簿作成の負担を軽減



ユメファーム 青山直也さん
兵庫県 JAたじま管内
(無農業・減農薬栽培米15ha)

Z-GISを活用し、農業生産工程管理のグローバルGAP認証を取得。作業帳簿の整備が条件の1つですが、農作業後に、だれかがまとめて入力するのはたいへん。Z-GISで各作業担当者が圃場からスマホで入力すれば、手間を分散でき、効率的です。

Z-GISで「見える化」し、 地域農業を未来につなごう

これからの農業経営になぜZ-GISが必要なのか。使ってほしい経営体やTACとの連携の可能性について、Z-GISの普及を進める平野さんに聞きました。



いままでの圃場の管理は、白地図に情報を手書きするのが主流で、わずかな修正すら手間でした。また、親が言う圃場がどこのことなのか、子やJA職員にはわからないことも多々ありました。紙の上や頭の中の情報をデジタル化し、営農の効率を上げる。それがZ-GISを開発した一番の目的です。

Z-GISは営農計画の策定に始まり、ブロックローテーションの調整、地権者と耕作者の貸借関係、従業員の作業時間や作業内容の履歴など、情報を選ばず、膨大なデータを各圃場と結びつけて管理します。たとえば、圃場ごとに生産者の年齢を入力し、5年、10年先の見通しをシミュレーションしてみてください。農業の人手不足は深刻ですが、現状の正確な把握と分析なくして、解決策は生まれません。Z-GISによって「見える化」され、蓄積された情報は、地域農業を絶やさないための財産なのです。

水稲や大豆などの大規模経営でZ-GISの導入が進んでいますが、露地野菜でも活用できます。ある産地では、JAがZ-GISに圃場を登録し、収穫量を予測。不足や過剰が予測される場合、早い段階で販売先に相談しています。TACといっしょに経営戦略を立てるさい、情報をどれだけ共有できているかで、質が左右されます。JAの担当者は数年で異動する場合がありますが、Z-GISがあれば、引き継ぎもスムーズです。

大規模経営でなくとも、ぜひZ-GISに触れてみてください。施肥量や収量、作業時期などの基本情報を去年と今年とで比べれば、作業の課題が見えてきます。また、Z-GISを親世代、子世代で操作することで「対話」が生まれ、事業承継のきっかけになることも期待しています。



— JA全農耕種総合対策部
スマート農業推進室長
平野幸教さん

幸喜ひかり
(家の光写真部) = 写真

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで
(<https://www.zennoh.or.jp/tac/index.html>)

TACもいちおし! Z-GISでスマート農業の波に乗れ

圃場の情報をインターネット上の電子地図にひも付けることで、営農管理を効率化する「Z-GIS (Zen-noh Geographic Information System)」。TAC (地域農業の担い手に向くJA担当者) が担い手に勧めるのは、情報共有による迅速で的確な提案や、事業承継の強い味方となるからだ。2018年のサービス提供以来、2万ダウンロードを記録したZ-GISの魅力に迫る。

JA全農TAC推進課=企画協力



まずはZ-GISの基本機能をチェック

その1

Microsoft Excel[®] と連携

圃場の位置情報(緯度・経度)とExcel[®]のデータをひも付けて管理。圃場ごとの作付け計画や作業内容など、どんな項目でも簡単に追加できます。以下の活用例をはじめ、自由度の高さが魅力。

- 圃場地図の合筆・分筆に応じた情報の修正
- 防除・施肥マップの作成
- 作付け計画の見える化
- 圃場ごとの作業量・作業時間の管理

その2

色分けで見やすい地図

高解像度の航空写真や電子地図など10種類の地図が使えます。Excel[®]で登録したデータを基に地図を色分けし、地図上にラベルやコメントを表示することができます。プリンターがあれば、A1サイズに拡大して印刷することもできるので、掲示して複数人で確認し、作業内容などを検討・報告するさいに便利です。

その3

いつでもどこでも データチェック

クラウド上のサーバー(強固なセキュリティシステムで安心!)にデータを保管すれば、タブレットやスマートフォンから複数人でデータを共有できます。たとえば、Z-GISの地図をスマートフォンで確認しながら圃場を巡回し、その場で生育状況を記録するといった使い方もお勧め。

注目の機能! Z-GISが人工衛星による生育診断と連携

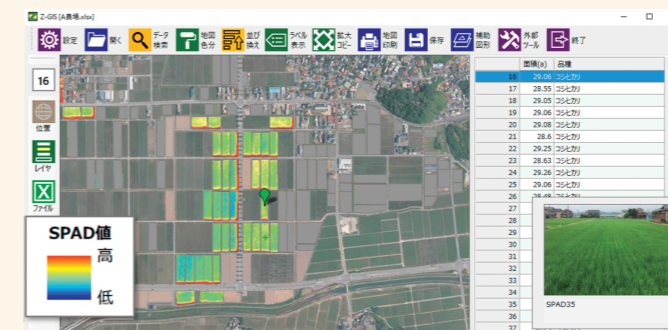
人工衛星リモートセンシングは、広範囲の作物や土壌などの状態を計測する技術。人工衛星やドローンで撮影した画像を解析し、圃場の農作物の状況を可視化した診断レポートを提供する国際航業(東京都)の「天晴れ」とZ-GISが連携したサービスの提供が20年4月から始まりました。

「天晴れ」による作物診断の申し込みにZ-GISで作成した圃場地図が使えます。また、診断結果をZ-GISに反映(下の画像)できます(※)。

Z-GISはユーザーの声を反映し、随時バージョンアップを行っています。今後追加される新たな機能に期待が高まります。

【Z-GISならお手のもの 診断結果活用のヒント】

- 収穫の順番の判断や、圃場間の育成のむらへの対処などに
- 複数の経営体で診断を申し込み、自分の圃場の結果だけを抜き出す
- さまざまな作付け品種の中から、特定の品種だけを抜き出す



※Z-GISを活用したリモートセンシング作物診断マニュアルを公開しています
<https://z-gis.net/99/usage/index.html>

「天晴れ」とは?

水稲、小麦、大麦、大豆を対象に、人工衛星で撮影した画像を解析し、葉色(SPAD値)や水分・タンパク含量を解析するサービス。1000ha(圃場以外も含む面積)から診断が依頼でき、利用料金は1作物1項目5万円から。北海道を中心に導入が進み、本州でも利用者が拡大中。

【Z-GISの利用料金】

登録する圃場数	利用料金
0~1999圃場	100圃場ごとに年2400円
2000圃場以上	年4万8000円

まずは31日間無料のお試し版の利用を



Z-GISの詳しい
情報と登録はこちら



<https://z-gis.net/99/>

イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」